日本人論再考 ～野球というスポーツから見る日本人～
Reconsideration of Japanology ～ A Japanese judging from baseball ～

1K06B158　　仲宗根　源
指導教員　主査　宮内孝知先生　　副査　友添秀則先生

【研究動機・方法】

近年、日本のスポーツ界には、諸外国から多くの指導法や哲学が持ち込まれてきた。その中で、どのような指導法が日本人に合っているのか、模索し続けている印象を受けた。その答えを見つけるためには、まず日本人を今一度見つめなおす必要があると思い、卒業研究のテーマとして日本人論を扱うことにした。

方法としては、日本野球界で起こった様々な日本人の特徴を表すエピソードを取り上げ、それらを『菊と刀』や『武士道』といった諸文献と照らし合わせながら、考察した。

【第１章】代表的日本人論の要約

先行研究として、『菊と刀』、『タテ社会の人間関係』、『甘えの構造』、『武士道』という代表的日本人論の要約をした。それらに共通して指摘されていたことは、日本人は「集団主義」的であり、自らの体裁を非常に気にする国民だということである。R・ベネディクトは、欧米が「罪の文化」であるのに対して、日本は「恥の文化」であるとした。そのことが示すように、日本人は価値判断の基準を、自らの内ではなく、外に置くのである。

【第２章】野球というスポーツから見る日本人の特徴

日本人は、「和」を非常に大切にする。チームの「和」を保つためなら、いかなる自己犠牲も厭わない。そのような考えの根源には、日本人の「集団主義」的な考えが関連している。個人よりも集団を優先することが美徳とされているため、「和」というものが重要視されるのである。また、日本人は幼い頃から「猛練習」というものを義務づけられる。それは、練習が単なる技術の修得のためのものではなく、「精神修養」のひとつだと考えられているからである。その根源にあるのは「武士道」の精神であり、それは今日の日本スポーツ界においても根強く残っている。

【第３章】アメリカ人選手から見た日本人

日本人の「集団主義」とは正反対の、「個人主義」という考えを持つアメリカ人から見た日本人を取り上げた。プロ野球チームの助っ人として来日した多くのアメリカ人選手は、その価値観の違いに苦しみ、衝突を繰り返してきた。そのような日米の価値観の違いを示すエピソードからは、日本人がよく見て取れる。また、アメリカ人監督から見た日本人を取り上げることで、アメリカ人選手とは違った視点から日本人を考察した。幼い頃から「猛練習」に慣れている日本人選手は、監督が練習を止めろと指示しても、その手を止めることはないという。そのほかに、日本人から愛されたアメリカ人選手を検討することで、日本人が外国人のどのような立ち振る舞いに好感を抱くのかも明らかにした。

【第４章】今後の課題と展望

まとめとして、これまでに述べてきたことを整理した。日本人は、「集団主義」的であり、それが良い面も悪い面も持っていることが明らか

になった。日本野球界、そして日本スポーツ界がこれから世界に通用する競技力をつけるためには、「集団主義」と「個人主義」のベストミックスが必要不可欠であると結論づけた。日本の伝統的価値観を大事にするとともに、欧米のような「個人」を育てる術を積極的に取り入れることで、日本の競技力は向上し、スポーツ界の発展に寄与することができると考えた。